

ワタナベイビー50歳バースデーライブ開催決定！ 会場は浅草公会堂！

2018年10月17日、私ワタナベイビーの50歳の誕生日を記念して、ホフディラン主催のバースデー・ライブを開催することが決定しました。会場はなんと浅草公会堂！無謀は承知の上です。それでも、「たった一度の50歳バースデー！どうしても頑張ってみたい！」とワガママ兼、固い決意のもと、ド平日の大ホール公演を開催させて頂く運びとなりました。平日には迷惑をおかけして本当に申し訳ありません。でも皆さん、この日だけはどうしても来て欲しいのです。頼むよ～、来てくれよ～！…と駄々をこねるならば、まずは私の人となりを知って頂くべきだ、という事で、この限定数百部発行の『ワタナベイビー新聞』にて、私の半生を振り返ることとなりました。波乱万丈か、いや、意外と平凡か？皆様だけに語ります。要は、单なるプロフィールです。

ワタナベイビー



本名：渡辺慎
(わたなべ しん)
1968年10月17日生まれ。
東京都練馬区大泉出身。
学院幼稚園～
大泉北小学校～
大泉北中学校卒。

幼稚園時代は仮面ライダー、小学校時代は野球とプロレスに夢中であった。野球は低学年時代はジャイアンツファンであったが、マセてくるとともにアンチ巨人化が進み、地元に進出してきた西武ライオンズファンに。プロレスは全日本プロレス派。ブッチャー、シーク組 VS ドリー・ファンク Jr.、テリーファンク組の試合に熱狂。特に、ザ・シークの火炎放射攻撃には並ならぬ興味を持つ。自宅にピアノがあり、時々触ってなんとなく音感が身についたが、昭和の男子小学生特有の『音楽は女のやるもの！』的な差別感情あり。

転機が訪れるのは小学校6年生の12月。ニューヨークにてジョン・レノン暗殺事件が起こり、テレビや街角から恵心なしにビートルズナンバーが断片的に耳に入ってくる。どうにも気になって仕方がなくなり、父親の車にあったビートルズの赤盤（ベスト版1962～66）ミュージック・テープを聴き、今までの人格とは全く別の人格へと変わってしまうほどのショックを受ける。最初の5曲を聴いている間に、『ああ、僕は違う人間になっている！』という実感があったほどの出来事であった。

渡辺慎少年からワタナベイビーという別人格の人間になるまでに要したのは『Love Me Do』『Please Please Me』『From Me To You』『She Loves You』『I Want To Hold Your Hand』のたった5曲。時間にしてたったの10分半。

中学入学と同時にすぐギターを購入（ガットギター）。いくつかのコードを覚えると、演奏テクニックよりも作詞作曲に夢中になり、毎日曲作りに勤しむ中学時代に。



中学入学と同時に購入したガットギター

最も初期の曲は『屁が止まらないぜ』『クソしたら血が出た』など、おふざけソング中心であったが、のちにホフディランとしてCDリリースされる『キミのカオ』『文通しよう』などの楽曲もすでに存在しており、まともな曲とバカ曲の落差の激しい初心者ソングライター時代であった。

出来た曲はすぐに同級生たちに発表し、辛辣な批評に耐えつつ、彼らの提案する題材を曲にしていく、という職人見習い的なトレーニング方法で腕を磨いた初心者時代。当時の友人たちによるランキングの結果、中学3年間でのナンバー1ヒットは『2人でナポリタンを』（BPLP収録）であった。

ボクシングにも夢中で、具志堅用高の王座後期、渡辺二郎全盛期あたりから、テレビの前で採点表を作り、自己採点をしてプロのジャッジの公平性を検証するほどの熱中ぶり。今までその姿勢は変わらず。

毎月の小遣いは全てビートルズのLPに費やし、ワルツ堂（レコード店）と大泉図書館の貸しレコードで人生ほぼ全ての音楽欲求は満たされたと言っても過言ではないであろう（他にはボブ・ディラン、ローリング・ストーンズ、RCサクセション等）。それ以降、新しい音楽にピンときたことはほとんどない（もちろん2～3の例外はある）。

1983年に祖父が他界。父が会社を引き継ぐ事となり、

中学卒業と同時に横浜市へ引っ越し。桐光学園高等学校に入学。

生まれ育った場所や友人たちと離れ、また校則の非常に厳しい高校に通うことになり、親や教師を恨む日々。50歳目前となった現在でも、当時の教師や校則への怒りは取まつておらず。

本当は何不自由ない甘ったれた環境の中で過ごしていたにも関わらず、ただただ苦悩と怒りと屈折の日々。ノートに書かれているのは不満、不満またまた不満。学校生活も楽しいとは到底思えず、日々を耐え忍ぶ、まるで服役囚のような気分で過ごす。なるべく深い友達付き合いもしないように心がけていた。そんな中には、強烈な親友が1人（変人というか、変質者）。現在は連絡も途絶えているが、今まで知り合った中でも最もクレイジーな人物の1人であった。もともと変わり者の資質があったところへ、彼とのお互いの悪影響もあり、ますます浮世離れ、変人化の一途をたどる。彼との3年間の狂った日々は、どこでここに書ける話ではないが、強烈なオリジナリティには満ちていたはずである。

当時の流行のサウンドにも洋邦問わず全く馴染めず。初めて行ったコンサートはジュリアン・レノン。続いてボブ・ディラン、RCサクセション。

ボクシング界は海外のミドル級王座を中心としたハグラー、ハーンズ、レーナード、デュランの4強によるほぼ総当たりのバトルが白熱しており、大袈裟でなく、それらのピック・マッチをテレビで（テレビ東京！）見るのが生きる支え。実際、『ハグラー vs ハーンズまであと100日！』のような日めくりカレンダーまで作っていた。

ずっと曲作り、ギター演奏を趣味としていたため、当然のごとくバンドを組んでみたかったのだが、志、実力の両面でなかなかレベルの釣り合う友人がおらず、また、「プロミュージシャンなんかになる人はよほど教育を受けたすごい人だ」という思い込みもあり、ミュージシャンを目指すどころか夢見るこすらなかった。

ただ、相変わらず作曲テープの批評、ランキングを続けてくれていた中学時代の口の悪い友人たちをして「この曲、本気でいいと思う！」と言わしめるような楽曲ちらほら出来始める。

ワタナベイビー楽曲が始めてラジオの電波に乗ったのは、高校2年生の頃で、後にホフディランとして準レギュラーを勤める事となるニッポン放送『ポップン王国』番組開始当初のころの出来事。当時の司会は上柳アナウンサー。友人の池田くんが勝手に送ったテープで、O.Aされたのは『さわぎなさい』という楽曲。当時の自分としては物凄い大事件であったが、翌朝も高校の同級生には誰にも、昨日のあの曲は自分だとさえ言わない生活であった。

音楽に限らず、全てはビートルズからの影響が人生のすべてだったため、本来ならば、まずは髪を伸ばす事が基本。それなのに毎月校門の前で繰り返される頭髪検査には怒り心頭（今でも怒っている）。その頃の当面の目標は、ミュージシャンでも、何か他の職業でもなんでもなく、まずとりあえずは「髪を伸ばすこと」であった。

もしバンドを組むという夢を持つなら、リバプールならぬ「練馬区大泉の同級生で、同じくらいの背丈のギターバンド4人組」しかあり得ないと思い込んでいた。つまり、約10年後のホフディランデビュー時の姿というのは、完全なる想定外の出来事であった。いずれにせよ、そんな希望を持つ以前にバンドを持った事すらなかった。

怒り悩み苦しんだ3年間もついに終わり、高校卒業！玉川大学文学部に入学。同時期に近所の質屋でカセット式の多重録音マシンを破格の安さで購入（ヤマハ CMX-1）。初めてギターを手に入れた中学1年生以来の衝撃で、またまた楽曲制作に力を入れる。



ヤマハ CMX-1

それまではラジカセ2台を使ったオーバーダビング兼ライブ録音で、デッキ間の互換性が悪く、録音スピードと再生スピードが合っておらず、チューニングも合わない中での録音生活。とにかく不自由であったものが、革命的に便利になった！

間もなくして、やはり同じ質屋で手に入れたリズムボックス『Roland TR-606』とともに、自分の音楽スタイルというものが、だんだん少しづつ確立されていく。



リズムボックス『Roland TR-606』

いわゆるキャンパスライフというヤツを少しだけ楽しみつつ、やっぱりどこか浮いたような存在でも

ありながら、毎週月曜日から金曜日の間に2~3曲を作曲。夜も寝ないでバックトラックを録音し、土日になると大学時代に最も親しかった安地くんの家に機材とマイクを持ち込んで歌入れ、コーラス入れ、という本格的レコーディング気分の日々に突入。思い切り歌入れをしても親に聞かれないと、家族にバカにされないと、というレコーディング天国！初めて録音にとことん打ち込む事が出来たのがこの頃。安地くんの家こそホフディランの原点！聖地！

完成した曲を10分カセットテープの両面にダビングして、クラスの子たちに売る、しかも結構売れる、という充実の日々。学食代には一切困らず。

ジャケット、歌詞カード付きで300円だったか500円だったか。ジャケットのイラストの筆名として初めてシン・ワタナベイビーを名乗る。そのカセット手売りの際に冗談でクレジットしていたのが玉川大学をもじった『多摩川レコード』というレーベル名で、のちのホフディランのファースト・アルバムのタイトルとなる。

当時リリースしたシングルカセットは

- 1st・『許してベイビー / わかってもらえないだろう』
 - 2nd・『アルバイト / あの子はきついぜ』
 - 3rd・『薬物はいけない / ベイビーもっと微笑みを』
 - 4th・『キミのカオ / 文通しよう』
 - 5th・『マフラーをよろしく / オレは関わらねえ』
 - 6th・『マフラーありがとう / 花の首飾り』
- 以下不明

ヒットシングルを連発！大学内ミュージック・シーンでも不動の地位を確立するかに思われた矢先、出席日数、取得単位が大幅に足りず、まさかの退学勧告！（書類上は一身上の都合による自主退学）。期末試験特有の大学生のいや～なノリ、教授への媚び売り、カンニングなどのせせこましい雰囲気にどうも馴染めず、なんだかな～、と疑問を呈しながらして、当の本人は朝イチのテストにことごとく遅刻、もしくは受験すら出来ず、という呆れた大失態の末の、自業自得の結果であった。

『うすぎたない大学生』『期末試験が終わったら』『彼女の微笑み』など、期末試験を題材とした名曲が多数残されている点から見ても、大学の期末試験および周囲の人間模様が、当時かなりの重要テーマであった事が伺えるが、現在となってはそこまでこだわっていたのかは全くの謎である。とにもかくにもやっと大学生になったのに、わずか2年で大学生ではなくってしまった。

この大事件により、カセット販売ルートおよび顧客をすべて失い、音楽は再びただの趣味に。

人格的にもまたまた決定的に屈折に屈折を重ねつつ、更にますます音楽活動に打ち込むしかない日々に突入する。

20歳にしていきなり学生の身分を失いながらも、父の経営する会社に入る事を拒み（親父の敷いたレールの上なんか！ってヤツ）逃げ回り、働いている風を装うためだけに明治大学生協書籍部の店員となる。なんとなく楽器屋あたりで働き、音楽に触れていたら楽しいんだろう、という適当極まりない理由で、御茶ノ水の楽器街へ出向いたところ、たまたま通りががつた明治大学生協の店長に、バイト店員としてスカウトされる。猫の手も借りたい新学期直前だっ

たというだけの理由であったが、スカウトで店員になった者は希だったとの事で、運命的でもなんでもない場面で、人生初のスカウト経験を果たす。大学をクビになった直後であり、「キャンパスライフに触れていられるならこれからも大学生みたいで最高じゃないか！」と、即決断。いくら遅刻してもクビにならず、居心地も悪くなく、結局明大生協には5~6年在籍。『遠距離恋愛は続く』など、数々の曲の題材となった外国人留学生と出会ったのも、この明大生協時代。

その時期に大量に制作したデモテープ作品たちが、後に友人からその友人へ、人から人へと渡り歩き、スチャダラパーをはじめとするLBネイション、小沢健二氏、音楽関係者、マスコミ関係者などの手に渡り、ダビングに次ぐダビングを重ねられ、本人すら意図せぬ独特の味わいのローファイ・サウンドとなって彼らの耳に触れることとなる。いつしか彼ら、若き大スターたち限定のローカルスターとなっていたらしいが、本人は、そんな事は全く知らず。日々呑気に学生たちに教科書を販売しては夜に作曲、という日々。

ちなみに、ホフディランというバンド名も明治大学生協時代に生まれる。

その後の雑誌記事などにより、『保父をやっていた友人と組んだバンド名』という内容で広く知れ渡る事となったが、その保父だった友人（ニッポン放送にテープを送った池田くん）とは実際にはバンド結成未遂に終わっており、彼とのホフディランは計画止まり。名前だけのユニットに終わる。

『ホフディランのバラッド』というバンド・コンセプトを打ち出した楽曲はあったものの、活動実績はなし。彼が保父をやめて、よりもよって葬儀屋に勤めた際には、ホフディランというバンド・コンセプトもなくなり、事実上消滅。『ホフディランのバラッド』という楽曲だけが残り、1人歩きを始める。

ところが、この『ホフディランのバラッド』という楽曲が大きな誤解を招いたのか、いろいろな事実がカープを重ねて伝え継がれていたのか、若きスターたちの間に広まった一連のテープは『ホフディランというバンドのデモテープである』と認識されるようになっていったようである。

そして、当時まだ面識もなかった川辺ヒロシ氏により、TOKYO No.1 SOUL SETのメジャー・デビュー記念、渋谷クラブアトロライブのオープニング・アクトとして抜擢されてしまう（1994年11月8日）。

出演オファーというよりは、本人が聞いた時点では決定事項として伝えられる。「川辺さん、勘違いです！ホフディランなんてバンドは実在しないし、僕はバンドすら持っていないんです！」と言いたかったものの、なにしろ面識すらなし。大変だ！なんとかして無理矢理にでもバンドを結成しなければならない！誰でもいいからメンバーになってくれる人はいないのか？人生最大のピンチ。当時25歳。ちょうど半分。さあ、どうする！

これが全てのはじまりの恋のはじまり～。

次号につづく

バースデーライブ詳細や
ホフディランの新着情報は
hoff.jp をチェック！